

国際ボランティア講座開設の意義と実際の展開 —フィリピン国際ボランティア演習を通して—

The actual deployment and significance of international volunteer course opening
—Through the International Volunteer exercises in Philippines—

清水 和久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

平成25年度に人間科学部こども学科を対象に「国際ボランティア講座」を開講、関連講座としてフィリピンの孤児院ハウスオブジョイにおいて「国際ボランティア演習」を行った。教員志望の学生にとって、国際的な視点を持ち、その知識の検証のために外国へ行って子ども達と接することはきわめて重要なことである。本論文においては、講座を立ち上げるまでの事前調査の結果、講座と演習の概要や内容を示した上で、演習などに参加した学生の意識の変容や、その後の活動の広がりなどについて言及する。

〈キーワード〉

国際ボランティア、フィリピン、ワークショップ

1 はじめに

近年のグローバル化に伴い、海外への長期・短期の語学留学などをセールスポイントとする大学が多くなってきた。一方、文化的背景が異なる人との協働による問題解決を目的とした海外フィールドワーク（岩井2010）^{*1}も見られるようになってきている。本大学においても長期・短期の語学留学制度が2年前からスタートしているが、希望者は経済学部生が中心であり、幼稚園、小学校の教員免許取得を目的とする筆者が所属する人間科学部こども学科では少ない。これは、語学力向上を目的とする留学では、幼小教員志望の学生のニーズにあわないことを意味している。

そこで語学力向上を主な目的とするのではなく、外国の人とふれあうこと、現地の人々の生活を体験し、一緒に問題解決型の活動をする、さらに国際的な視野を持つことなどを目的とする活動であれば、人との関わりを重視する学生のニーズにも合うのではないかと考えた。それで上記の活動を含んだ、理論を中心とする「国際ボランティア講座」、外国での体験を中心とする「国際ボランティア演習」の2つの講座を実施することとした。

2 研究の目的

本学では、まだ海外においてフィールドワークの事例がないため、その事例を作ることを第1の目的とする。そのため、理論と演習の2つの講座を企画して実施、これらの

成果を明らかにし、課題を検討する。

3 研究の方法

はじめに、他の大学のフィールドワークの先行事例を調査し、比較的初心者でも行くことが可能な国、地域、活動内容について吟味し訪問国を決定する。

次に、「国際ボランティア講座」の講義の内容を決定する。具体的には世界の貧困の現状を開発教育の経緯に基づいて分析し、国際ボランティアのこれまでの歴史や、現在問題となっている支援の仕方について学ぶ内容とする。

そして、上記の講義修了者を対象に、理論を自分の目で確かめるために実践編として「国際ボランティア演習」を実施する。

(1) 事前調査の実施

海外フィールドワーク先進実施大学への訪問

- ・ 摂南大学国際文化コース（浅野英一教授）
- ・ 関西大学大学院総合情報研究科（久保田賢一教授）

(2) 国際ボランティア講座のシラバスの作成と実施。

- ・ 理論学習
- ・ 開発教育のワークショップ、
- ・ 講演:JICAの青年海外協力隊体験談、
- ・ 講演:NPO等のプロジェクト実施者の話

(3) 国際ボランティア演習の実施

フィリピンのダバオ市において下記の内容を実施

- ・ ミンダナオ国際大学との協働学習プロジェクト
- ・ ハウスオブジョイと日本の小学校との協働学習支援
- ・ ハウスオブジョイでのボランティア活動

3 研究の結果

3-1 事前調査

この講座を立ち上げるに当たり、海外フィールドワークを実施している摂南大学、及び関西大学大学院総合情報研究科へ聞き取り調査を行った。(2012.2)

3-1-1 先進事例の調査1(摂南大学国際文化コース)

本文化コースでは大学在学中に難関のJICA(青年海外協力隊)に合格する学生を多数輩出している。在学中に、難関とされるJICAの青年海外協力隊の選抜試験を受ける。合格した者は2年間の海外経験を積み、後帰国後は大学に復学して、教員になる学生が多いという事実がある。

なぜこの学生がJICAの採用試験に受かるのか?1,2年の間に国内の「人・もの・金」のない過疎地でボランティア体験を積むことが大きいとのことであった。JICAで青年海外協力隊員として活動する場合も、「人・もの・金」がない場所での活動になる場合が多く、国内ボランティアの経験が役に立つ。現地の人にかに信用されるかが大事であり、そのような場所で活動できる学生は。教育現場においても人と人との関係を切り結んでいける人材であるからである。

○具体的な取り組み

- ・ 地域連携の経験(2年)

週1コマ 地域の小学校に入ってボランティアの体験1年30コマで2単位認定。10分以内で通える小学校と連携。夏には学生1人が10人を担当する遠泳を実施

- ・ 地域連携(希望者)

和歌山県すさみ町に廃校になった学校を借り摂南大学が地域連携の事業を実施、夏春に学生が企画する忍者キャンプの実施、春はサバイバルキャンプ^{*2}

- ・ 海外ボランティア体験

フィリピンのダバオ市の孤児院(ハウスオブジョイ <http://hoj.jp/about/>)での2週間海外実習体験

○浅摂南大学 浅野英一教授へのインタビューより

外国語学部はいろいろな大学にあり、より専門性のある、人気のある大学に学生が行ってしまう。そこで出口保障として国際文化コースでは教職とリンクさせ、海外での経験を教職に有利になる形で利用している。外国語学部に入学する学生にも教職をとることを勧めている。地域連携で学生を鍛え、その力をバネに海外での留学経験、ボランティ

ア経験を積み、JICAへの試験を受けさせる。海外での経験は教員採用にプラスに働く。

摂南大学の評判は地域の中に入り、学校に入らる中で評判があがってきた。地域連携の力で蓄えた力がJICAでの選考試験に反映される。

これらのことから教職に就くにも海外での協働作業、ボランティア経験は重要であり、地域連携などで地道に学生に力をつけていくことも必要であると考ええる。

3-1-2 先進事例の調査2(関西大学大学院)

関西大学大学院総合情報研究科では、2007年度よりフィリピンでの海外フィールドワーク^{*3}を実施している。大学院生と学部生が継続的にフィリピンに入り、マニラ郊外における初等教育の教育改善のため視聴覚メディアの活用を促すことを目的としたICT活用に関する研修を実施している。期間は2,3週間であるが、継続的に行っているため複数回参加する学生も多い。ここでは、参加する学生間の協議が重視され、継続的に行われていることで学生と現地の人の関わりが重視される学習デザインになっている。

また、久保田教授はフィリピンでのフィールドワーク時には、ダバオ市の孤児院ハウスオブジョイにも訪問していることがわかった。

このハウスオブジョイは、元青年海外協力隊経験者の日本人である烏山逸雄氏が建てた孤児院であり、フィリピンで親をなくしたり、何らかの事情で家族と一緒に住めなくなった子どもを預かって育ててくれる施設である。毎年多くの訪問者が日本から訪れ、孤児院の子ども達とふれあう事のできる施設である。

訪問者はこの施設に滞在し子どもたちと関わりながら、近所の学校への訪問や現地の村での交流や、さまざまな活動等を行うことができるため、外国でのフィールドワークが初めての学生でも取り組みやすいと思われる。

3-2 国際ボランティア講座のシラバスの作成と実施

授業のシラバスを作成するにあたり4つのねらいを掲げ、講座の内容を決定した。

1. 国際ボランティアに関わる基礎知識を知る
2. 開発途上国の問題をワークショップ形式の手法で体験することで当事者意識を持つ。
3. 国際交流プロジェクトに対するイメージを持つ。
4. 国際ボランティア経験者の話を聞き、本人の生き方について学ぶ。

3-2-1 国際ボランティアに関する基礎知識

これまで開発途上国に対してたくさんのNPOが支援を行ってきた。開発プロジェクトの変遷として大きく分けて

表1 国際ボランティア講座の内容

回数	テーマ	内容
1	導入	なぜ今グローバルな視点が必要なのかを知る
2	国際理解とはなにか	なぜ開発途上国は貧困に悩まされているのか、現状について知る 第1回レポート：途上国の抱える問題
3	模擬体験を通じた国際理解	ワークショップ「マジカルバナナ」を通して、南北格差について考える
4	開発教育とは何か(理論編)	開発教育とは何か、その歴史について知る
5	開発教育とは何か(体験編)	開発教育教材「ひょうたん島」のワークショップを体験する
6	学校における国際理解教育	ESD教育でもある「アートマイルプロジェクト」を知る。学生同士によるTV会議の模擬体験をする
7	講演：ESD教育の話	ゲスト：アートマイル代表塩飽隆子氏の講演を聞く
8	国際協力を受ける国々1 フィリピン	フィリピンの現状と課題 第2回レポート：フィリピンに関して調べる
9	国際協力を受ける国々2 モンゴル	開発途上国(アフリカ)の国々の現状と課題 第3回レポート：モンゴルに関して調べる
10	講演：モンゴルの話	ゲスト：青年海外協力隊員(モンゴル)の講演
11	開発途上国の発表	第2回、3回のレポートの発表会
12	訪問地フィリピン	演習予定先フィリピンの孤児院「ハウスオブジョイ」について理解する
13	講演：カタールの話	急速に開発が進むカタールについての講演
14	国際協力の課題	今後の国際協力はどうかあるべきかを考える。 第4回レポート：これからの国際協力の提言
15	発表とまとめ	国際理解の意味づけと国際ボランティアの意味づけを自分なりに行う グループごとにテーマにもとづいて発表

3つの段階を経ている。^{*4} 最初の段階は「慈善型開発」といわれるもので、困っている人や弱い立場の人に対して、物資や資金の提供するものである。しかし、現地のニーズを十分把握していない場合や、住民の自立を妨げる場合もあった。

次の段階は「技術移転型開発」である。受益者のニーズを把握して、技術を有する先進国側が教育、訓練を通して途上国側に組織的に技術を伝達して、そこでの定着普及を図るものである。しかし、これも、移転する技術の内容が必ずしも現地のニーズにあったものであるとは限らないため定着まで至らない場合があった。

最後の段階は「参加型開発」である。開発の受益層自身が開発の意志決定プロセスに参加し、より公平にその恩恵を受けることが含まれる開発である。

この3通りの支援方法がこれまで開発途上国に対して行われてきており、ボランティアも最終的には現地に入り、現地の人と一緒に考えながら行う問題解決型の取り組みが必要であることをおさえた。

3-2-2 ワークショップ教材の活用

開発途上国の問題を考える場合、身近なこととして考えられない場合が多いので、ワークショップ形式で取り組む事ができる開発教育協会の教材を使用した。

○ワークショップ1「マジカルバナナVer3」^{*5}

この教材は、市場経済の中で消費者の消費行動が生産する側にどう影響を与えるかに気づき、問題意識を持つようになる事を目指している。具体的には、収穫されてから店頭と並ぶまで、たくさんの手間と時間がかかっているバナナの価格や種類を知ることで、バナナの安い価格は南の国々に暮らす人々の搾取の上に成り立っているという事実を知る事ができる教材である。以下5つのユニット構成を表にまとめた。演習でバナナの生産が多いフィリピンに行くことも意識してこの教材を使用した。

まずユニット1で自分の消費行動を知り、買い物時に商品を選ぶ基準が、価格の安さや品質など人によって違うことを知る。ユニット2では、バナナにまつわる基礎情報(品種や栽培方法)についてクイズ形式で答え、プランテーション

表2 開発教育教材マジカルバナナV3のユニット

	ユニット名	内 容
1	買い物ランキング	買い物をする時の基準を問う。価格、添加物の有無、会社名等、各自の選択基準を認識する
2	マジカルバナナクイズ	バナナに関しての歴史、日本とフィリピンとの関係、プランテーション等の知識を得る。
3	ミニお芝居	プランテーション農業の労働者とバナナ生産者の生活の違いを知る。
4	2つのバナナ	日本で見られる2種類のバナナの生産方法の違いをカードゲーム形式で知る
5	ふりかえり	バナナの学習から公正な社会、ともに幸せを分かち合う社会にするための方法を考える

ョンによる大量生産の方法や個人栽培の背景を知る。ユニット3では、プランテーション労働者の過酷な生活を学生がお芝居にして演じることで労働が過酷であることを知る。ユニット4では、販売されているバナナの種類を判別し、プランテーションで作られたものと個人で生産されたものの違いを知り、生産者に思いをはせる。最後のユニット5では、総合的に振り返り、公正な社会の在り方を考える場となっている。

低価格のバナナがプランテーションにおける生産者の過酷な労働によって成り立っていること知る機会となった。

○ワークショップ2「ひょうたん島問題」^{*6}

「ひょうたん島問題」は海を漂うひょうたん島に、カチコチ島、パラダイス島の人々が移住してきたことから起こる様々な問題をそれぞれの立場で演じるロールプレイングシミュレーション教材。ひょうたん島は日本、カチコチ島は、北方系の住民、パラダイス島は南方系の住民を表している。本来は日本における多文化共生社会を考えさせる教材であるが、コミュニケーション、文化・祝祭、言語・教育、集住と分離、資源・環境などを題材にさまざまな摩擦が起こる中で、マジョリティとマイノリティそれぞれの立場に立ってロールプレイすることで、問題解決の方策を参

加者が共に考えることができる教材である。いろいろな価値観があることを考えさせる場合には有効である。

これらの参加型ワークショップでは、受講者自身がその場で役割を与えられ、思いを表現することを求められるため、深くその立場を理解する事につながった。

3-2-3 国際交流プロジェクトについて知る

学生自身にも外国の人に対する意識を持ってもらう為に、国際交流プロジェクトへの参加を求め、希望者には「国際協働壁画制作アートマイルプロジェクト」に参加してもらうこととなった。この国際交流プロジェクトは日本と外国の学校とを結び半年間をかけて共同で1枚の絵(1.5m×3.6m)を描くプロジェクトである。Japan Artmile^{*7}という団体が企画しており、小学校から大学まで、毎年100校程度が参加している。今回はフィリピンのミンダナオ国際大学と金沢星稜大学がこのプロジェクトに参加し、共同で1枚の絵を描くことになった。また金沢市内の小学校ではこのプロジェクトでフィリピンとパートナーになっている学校もあり、フィリピン訪問時に直接日本の小学生の声を届けることになっている。

○講演 Japan Artmile 代表の講演

Japan Artmileの代表である塩飽隆子氏にTV会議で講演をしていただいた。その中でアートマイルのプロジェクトの概要について説明を受け、そのねらいを伺った。

塩飽氏はこのプロジェクトで、国境を越えて参加者同士が協働で学習し、壁画という成果物を完成させることで、達成感を味わい、相互理解が進むと考えている。これは究極的には世界平和につながるという考え方である。

この話を受けて参加者はフィリピンと行う国際交流の意義を確認できた。

○講演 iEARNカタル世界大会についての講演

International Education and Resource Network (iEARN) とは世界最大の教育ネットワークであり、150以上の国際協働プロジェクトを実施している団体である。この大会が2013年度にカタルで開催され、その世界大会に参加した筆者がその会議の様子を話した。世界中の教員が集まりこのプロジェクトに参加することで児童生徒間の交流を行っている様子を紹介した。先に述べたアートマイルプロジェクトもiEARNのプログラムの中の1つに入り、全世界で行われている国際交流のプログラムを感じることができた。

3-2-4 国際ボランティア経験者の講演

○講演 JICA 青年海外協力隊員の講演

北陸JICAへアジアでの青年海外協力隊経験者の講演を依頼し、モンゴルでソーシャルワーカーの仕事を行ってき

た井奈由香元隊員の話伺った。モンゴルでの生活の苦勞の話を中心にしていたが、青年海外協力隊に参加しようと思った井奈さんの強い意志に学生達は心を打たれたようである。また、与えられた環境でどのように工夫して現地の人々のためになることを考えられるかが重要であることを理解した。

また、井奈田氏の「20歳だったら夢を持つことでこれから何にでもなれる」ということ言葉に勇気づけられた。

3-2-5 国際ボランティア講座に対する評価

受講生14名に4段階評価(1. 満足, 2. まあまあ満足, 3. やや不満, 4. 不満)で中間アンケートを行ったところ。全員が1の満足という結果であった。理由については、6名がワークショップ形式の授業におもしろさを感じ、8名が世界のことを扱う内容に言及していた。また、ワークショップでは自分の役割で話をするのでコミュニケーションの深まりも感じたようであった。

3-3 国際ボランティア演習

ねらいは以下の通りである。

「『国際ボランティア講座』で発展途上国に対する国際支援等の基礎理論を学んだ上で、実際に開発途上国であるフィリピンに出向いて理論を確かめる。また、滞在国のフィリピンではHouse of Joyという孤児院に滞在し、現地の大学生、子ども達と接する中で言語を越えたコミュニケーションスキルの大切さを学ぶ。これらの経験を通して将来教育に携わる人間としてのスキルアップをめざす。」

今回は直接の国際ボランティア体験の他に、フィリピンの大学生との国際交流プロジェクトであるアートマイルプロジェクトのための交流。日本の小学校とハウスオブジョイのアートマイルプロジェクトの支援、現地の村民との交流なども行う事とした。

以下、フィリピンで行った演習を時系列で記述する。

期 間 9月13日～23日

場 所 フィリピン ミンダナオ国際大学、
ハウスオブジョイ (以下HOJと表記)

参加者 学生11名、教員3名

(国際ボランティア講座受講者14名中、日程の都合のついた11名の参加となった)

3-3-1 国際ボランティア演習の実際

○3日目 児童との交流日

朝、HOJの敷地内を一通り案内してもらう。敷地内にはいくつもの建物がある。コンベンションホール(集会所)、シスターハウス(訪問者用宿泊施設)、男子用建物、女子用建物、クボタハウス(ビジター用調理場)、図書用建物、

表3 フィリピン演習日程表

日	内容
1	移動日 金沢→関西空港（夜行バス）
2	移動日 関西空港→ダバオ空港（車）→HOJ到着
3	児童との交流（マプティ渓谷）夜歓迎会
4	バスケットボールゴールポスト修理
5	ミンダナオ国際大学訪問 グループ交流
6	トゥボラン小学校訪問と授業体験
7	バトバト村民との交流 チキンカレー料理
8	ティナンタイ珊瑚礁観察 Tシャツアート
9	児童との運動会 水ロケット打ち上げ大会
10	移動日 ダバオ空港→マニラ→関空
11	移動日 関空→金沢（夜行バス）

マミーズハウス（管理棟）などである。

その後HOJの子ども達と活動「マプティ峡谷」での川遊び。HOJからトラックの荷台にのって約20分。風を受けながらの最高にスリルのあるドライブだった。

渓谷には崖の途中にツリーハウスがあり、子ども達と遊んでいる間、スタッフはご飯作りをしてくれた。HOJの子ども達もここに来るのは3ヶ月ぶりであったらしく大喜びであった。学生は、子ども達と思う存分、遊ぶことができたようである。中でも崖からの飛び込みは大人気であった。食事を終えて少し川遊びをした後、またスリルいっぱいのトラックに乗ってHOJへ。

教員はHOJから少し離れているシャロームハウスで一時的休憩。そのあとバイバイバトバト村の下見のための散策。学生は休憩後よさこいの踊りの準備。17時から食事。その後歓迎会。

HOJの児童の司会により、星稜大学の自己紹介、直江先生の歌のお披露目、学生の出し物、そしてHOJの子ども達のダンスと楽しい時間を過ごしました。1日目ですいぶん中味の濃い活動ができた。まだフィリピンにきて1日しかたっていないとは思えないくらいであった。

○4日目 バスケットのゴールの修繕

2006年に別の大学のビジターが制作したバスケットボールの支柱が折れて使えなくなっているのを星稜大学で修復することになった。

ゴールがついたボードはすでに修復されていたが、支柱が腐って折れてしまっているのを、その支柱を修復して立て直すことになった。HOJを訪れるビジターには、ビジター自身で考えてのお手伝いがあり、どうやってこの支柱を立て直すかは、ビジター自身で考えることとなった。

はじめに、折れた支柱にゴールのボードをつけて、それに色を塗るという段取りで始めた。ボードを支柱につける



写真1 バスケットゴールポストの修繕

ための垂木が何本必要で、どこにつけるかなども自分たちで考えて釘を打つ必要がある。

ところが、ボードを支柱につけて、白で塗り、ボードの枠を黄色に塗ってから立ててみると地面からゴールポストまでの高さが低すぎることが判明。試合用の320cmにたりないということがわかった。考えてみると支柱は折れたのだから短いのは当たり前であった。結局支柱を継ぎ足すことになり、男子学生4人とHOJのスタッフで市場へ買い物に行った。

支柱を継ぎ足すための木材を求めたが、結局4m20cmの直径12cmの丸太を700ペソ（2800円）ほどで購入。車に入らないため、学生4人で担いでHOJまで運んだ。しかしこの木を切って継ぎ足すより、ボードをつけた支柱そのものを変えた方が早いという話になり、せっかくなのでボードを支柱から外し、一からつけ直した。

また、ボードをつけた支柱はとても重いので、土に刺して埋めるだけでは弱いため、コンクリートで固めることになった。これも砂とコンクリートを買ってきて地面上でコンクリートをまぜ、地面を掘って流し込んで完成となった。学生は初体験ながら、穴をひたすら掘る者、混ぜる者、流し込む者など、誰一人サボらずに最後までがんばった。

これぞボランティア。バスケットのゴールポストには日本とフィリピンの国旗を描いて完成した。そのできに学生は満足していた。

○5日目 ミンダナオ国際大学訪問

朝食後、車2台に分乗して一路ダバオ市内へ。車の時速は100キロ。前の遅いバイクをよけるために対向車線に大きくはみ出したり、対向車とぎりぎりですれ違ったりと、スリル満点の運転であった。1時間30分ぐらいで9時に到着。町中にある6階建てのかなり大きな建物。入り口で日本語センターの所長さんと会う。相手は18人でほとんどが女の子。3つに分かれて市内見学へ。

MKDは350人ほどの学生がおり、5つほどの学部がある。日本の提携大学は、5校ほどある。これらの提携校とはskypeによるマンツーマンの英会話の授業を行っている。



写真2 ミンダナオ国際大学 (MKD)

MKDは内田あやこ氏の教育基金で2001年に開校、日本フィリピンボランティア協会の網代正孝会著の尽力もあり現在に至っている。

学長と対談後、隣の小中高の学校の見学。生徒は赤い制服を着ていた。高校は2年間で小学校が6年後、中高で4年間、その後大学生になる。ただ現在は教育改革で中高も6年になる。大学の問題は教育制度の以降期間の2年感は中高が2年間延びることになり、学生の入学者数が1人もいなくなる。このMKDは隣の中高と系列が同じなのでその間は高校生を入学させて高校部という形で授業を行うとのことであった。当初は予定になかった1,2年の学生との交流も実現。最初は自己紹介、その後は日本の学生のプレゼン（大学の紹介と金沢の紹介、最後によさこいソーランの踊りの披露をした。

その後、アートマイルの交流をする相手である3年生と交流。金沢紹介、星稜紹介、ビデオの学生の1日、よさこいソーラン、アートマイルプロジェクトの紹介をおこなった。先に1,2年生を相手に1回やっているの余裕を持ってプレゼンができたようである。プレゼンの山場にもしっかりと反応が返っていたので学生はとっても自信を持ったようである。

○6日目 トゥランボン小学校訪問



写真3 トゥランボン小学校

ウラワビーチの近くの小学校に訪問。最初に全校朝会があり、校歌斉唱を行っていた。この学校は今回初めて外国からの訪問を受け入れるようであった。各学年1クラス、

学年によっては複式のクラスもあった。はじめに授業見学をさせてもらい、その後学生は、日本のクイズとよさこいソーランの踊りをおこなった。

最初の授業見学では、クラスによっては学生が授業をさせてもらったところもあった。6先生のクラスでは、簡単な復習のあと元々今日はテストの予定だったが、やめて日本の学生に時間をくれることになった。突然振られても自己紹介を無難にこなすことができていた。そのあと学生が振り付けの歌とダンスを即興で指導。こども達も楽しんで覚えていた。

休憩時間のあと、全員が1つの部屋に集まり、学生側が用意してきた日本のクイズと、よさこいソーランの披露。こどもたちからは拍手喝采を浴びた。そのあと、PTA会長の村を訪問、この村にはモスクがあり、モスレムの家族も多い。モスレムはフィリピンではマイノリティで、就職もクリスチャンに比べればハンディがある。その分モスレムの保護者は教育に熱心で、積極的に子供を学校入れて学歴をつけようとしているようである。

夜はアートマイルに参加している金沢の浅野川小学校からのメッセージを紹介。学校紹介のビデオを上映し、預かってきた2クラス分の自己紹介の紙を見せると我先に写真を見ようと集まってきた。HOJの自慢は?ときいたところ「スマイル」と答えた子が多く学生は感動していた。どのこどもの笑顔も言葉通りすばらしかった。

○7日目 近所のバイバイバトバト村訪問



写真4 漁業用の舟

HOJの近くのバイバイバトバト村（石が多くて不毛の地の意味）へ行き村民との交流。この時の朝は最大の満潮で、近海の台風の影響もあってか、家のすぐそばまで潮が満ちていた。しかし、昼に向けてどんどん潮がひいていき、お昼頃には海岸線が大きく広がっていた。

HOJのスタッフにつれられて村をまわった、村には子ども達が多くいた。今朝は風が強くエンジン付きでない船は沖に船を出すのが難しく、ほとんど出漁はしていなかった。出漁しないと魚が捕れず、現金収入がなく、米に替えられず、ご飯がないということで、朝はマンゴウと干し魚とい

う家が多かった。魚が捕れない日は子ども達も弁当がないので学校に行かないとのことであった。

服装は小さなこどもは上着だけでパンツなどをはいていない子も多かった。18才で結婚する子も多く、1家族のこどもの数は5,6人のところが多かった。

この村には100世帯あり、1家族の人数は平均10人である。船を一回出すと船を持っている家で900ペソの売り上げ ガソリン代は300ペソなので実際の実入りは600ペソ。これで11人家族が1日暮らすことになる。(1ペソ2.5円) やとわれた若者の場合は、船のクルーとして1日働くとして180ペソ程度であった。

子ども達の遊びを見学、空き缶を立ててスリッパを投げで遊ぶ遊び。鬼は缶を立てたこどもでその缶を倒されるとまた立てに行く。スリッパが外れると外れたスリッパを踏み、踏まれた子のなかから鬼になる。最初に鬼を決めるときには、空き缶をひっくり返してうまく半回転して立つかどうかで決める。

後半は村の若者チームと星稜大学チームでバスケットの試合。村の広場にはどこでもバスケットコートがある。そのあたりにいる青年に学生が声をかけて実現。白熱した試合で、最初は星稜が大幅リードであったが、最終的には体力が続かず逆転負けであった……。終わった後は村の青年達とジュースで乾杯。スポーツの交流は言葉がいらぬ分、打ち解けあうことが容易にできた。



写真5 自らさばいた鶏での料理

午後は学生によるチキンカレーと味噌汁のふるまい料理。カレールーだけは日本から持って行き後は現地調達。みんなで市場に買い物へ。冷蔵庫があまり普及していないので当然肉は必要なときに「さばいて」食べることに。鶏は1羽だいたい200ペソ。重さで売っているの、やせた鳥の場合は50人分だと7羽必要。

子ども達の分も入れて50人分の料理は作るの鶏は7羽。一羽200ペソ。学生はいやがるかと思いきや、積極的にさばく。首を切って血を出した後、熱湯に入れて羽をむしり、肛門に切れ込みを入れて内臓を出し、解体。昔小学校で飼っていた鶏を食べる授業をやった賛否両論が巻き起こったが、ここでは日常であった。学生も積極的に挑戦。

たくましさを感じました。カレーはこども達にも好評。味噌汁は具の大根が苦く、人気はもう一つ。

○8日目 ティナantai (珊瑚礁) 観察

海岸より2隻の船を漁師付きで借りて出航。40分ほど沖合に出たところで突然海の色が変わり珊瑚礁についたことがわかる。お昼に近づくとどんどん浅くなり、腰までの深さになり、歩けるほどであった。とてもきれいな珊瑚礁に一同感激。2時間ほど泳ぎ、船上でご飯。最高に気持ちのいい1日となった。



写真6 Tシャツデザインのワークショップ

夜はTシャツデザインのワークショップ。日本から持ち込んだTシャツを学生が着込み、このTシャツをキャンバスに、子ども達がクレパスで絵を描く。テーマは宝物。様々な宝物が描かれた。「一輪車、学校、猫、ロケット、日本の友達、バスケットゴール、ドラえもん、家族など」。子ども達が日頃大切にしたいものがよくわかった。絵での表現は世界共通であった。

○9日目 運動会



写真7 学生が企画した運動会

活動最終日、ウラワビーチにて学生が企画した運動会。4色のグループに分かれて、2人3脚、綱引き、リレーと3種目。学生が企画し、3つの種目で点数を競いました。子ども達も大はしゃぎ。でとっても盛り上がりました。

その後、学生が日本から持ち込んだペットボトル水ロケ

ットの打ち上げ大会も行った。水の圧力だけで100mほど飛ぶ水ロケットは子ども達に大変人気があり、子ども達は何度も水の量を調整しながら、たくさん飛ぶ方法を考えて、挑戦していた。少々疲れ気味の学生はもっぱら海に入っているロケット回収役となった。

夜の別れ会では、どの学生も涙を流して別れを惜しんでいた。子ども達に何かをしてあげたいと思ってやってきたフィリピンであったが、子ども達の笑顔の中で、たくさんの元気をもらい、人と関わることのすばらしさを学んだ演習となったようである。

3-3-2 参加者の感想から

参加した学生の演習後のレポートをいくつか紹介する。

「この子どもたちは、言葉の通じない私たちに何の抵抗もなく自然体で近づき、笑顔で接してくれる。その笑顔と明るさにはたくさんのパワーをもらった。日本の生活と違ってものは豊かでないし、不便なこともたくさんあるし、決して清潔とは言えない暮らしだけでも、その笑顔の中にいるだけで幸せを感じられ、「生」という実感に満ちていた。」(3年女子)

「自分はHOJの子どもたちに何かしてあげたいという思いで現地にいったが、実際には、してもらうことがほとんどで、自分からこれをやり遂げたというものは何もなかった。ただ、ひとつだけ自分の中で実感できるものがあるとすれば、自分たちがビジターとしてここに滞在し、1週間子どもたちとともに過ごすことができたことである。何よりもそこにいた子どもたちと一緒に空間と時間を共有できたことが大切であったのではないと思う。国際ボランティアというのは、現地にいる人と親しくなることであると思う。それがないと国際ボランティアでもなんでもない。ただのおせっかいだ。親しくなった関係の中で共に活動をしていくことが国際ボランティアだと強く感じた。」(3年男子)

事前の講義で開発途上国の現状や国際ボランティアの在り方を学んだ上で現地を訪れた。1週間の滞在で学生ができる「国際ボランティア」は、本来のボランティア活動として成立するとはいえないものかもしれない。しかし、書物の上で学んできた貧困の現実を学生自身が見ること、実際に滞在してその生活を味わうこと、そして将来教員を志望する学生にとって、現地の人と接して交流すること自体に意義があると思われる。

4 成果と課題

○国際ボランティアの講義での成果

講義の内容は、開発途上国の現状を大局的に見て、貧困の構造等をマクロ的に理解することであった。はじめは、

貧困で苦しんでいる人に支援物資を届けることで問題が解決すると考えていたが、貧困の原因は教育機会の不足であると考えようになった。しかし、教育を受けることによって逆に子供達が外国に出稼ぎに行き、村の存立自体が危うくなったり、世界とつながってグローバル経済に飲み込まれることで環境破壊が広がり、ますます貧困になったりする場合があることもわかった。

大きな視点から世界の貧困問題を考える事で教育や経済問題にも考えを及ぼす必要性を感じることができた。また、国際ボランティア経験者や世界平和のために国際交流を進めていこうとする人の話を聞いて、その人の生き様や考え方を通して自分のこれからの進路を考える事ができた。

○演習の成果

一方演習は、現地を訪れ実際に自分の目で見て、自分で考えることをねらいとした。ボランティアは単に労働力を提供するのではなく、現地に行って人々との交流の中で見つけ出していく物である。

HOJでの労働という意味でのボランティア活動は、壊れたバスケットのゴールポストの修復だけである。その他はいろいろな企画を通してこどもたちとふれあい、ともに過ごしたことである。「かわいそう」と思っていたこどもたちに何かをしてあげようと思って行ったけど、現地では自分のできる事の小ささを知り、逆にこどもたちの純真な笑顔、明るさにふれて心が洗われたという思いが強かったようである。これはどの学生も共通に感じた部分であった。

またHOJではこの孤児院と国際交流プロジェクトを行っている日本の小学校からのメッセージも届けることができた。今後も両者の橋渡しを学生が行っていくことになる。

最後に、訪問前からフィリピンのミンダナオ国際大学と共同で進めていた国際交流プロジェクトは、現地で実際に会えて交流できたことによって、帰国後もSNSでつながり、壁画のデザインの話し合いもスムーズに行う事ができ、12月の末には完成した作品を相手国に送っている。

○その後の波及効果

この演習に参加した学生は自分の経験をより多くの人に伝えたいという思いを持ち、帰国後にHOJのスタッフが日本に来る機会を捉えて大学に呼びことができ、講演会においてHOJの子供達の実状をより多くの人達に伝えることができ。そして、その講演会を聞いた他の学生がその後単独でフィリピンを訪れている。その上、軽音楽部が台風でフィリピンに被害が出たことを知りチャリティコンサートを行うなどフィリピンにまつわる行動が広がっていた。

フィリピンへの訪問を年に1度のイベントとして捉えるのではなく、継続的に関わる仕組みを作ることが重要であり、その継続性が学生を外国との関わりにおいて活動的に

し、国際ボランティアをやってみたいという行動につながると思われる。

○国際ボランティア講義・演習の構図

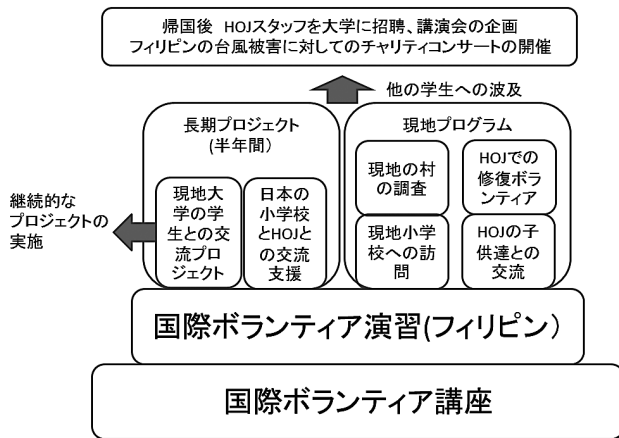


図1 国際ボランティア講座の概要

今回の一連の動きをつなげてまとめると図1のようになる。

まず、国際ボランティア講座として世界の貧困問題などについて知り、国際ボランティアの在り方について考え、自分なりの問題意識を持つ。

次に国際ボランティア演習では、現地の人々の生活を理解するためにHOJの子ども達とふれあい、現地の学校を訪問し、村の人達の接する。

この演習の中では、現地でしかできないプログラムの他に、事前に国際交流プロジェクトをフィリピンの学生とスタートさせておき、半年間のプロジェクトの一部としての出会いの場として位置づけた。また学生にフィリピンと日本の子ども達との交流の支援する役割も同時に持たせた。こうすることで訪問の前後での関わりが生まれ、イベント的な訪問にならなかった。

帰国後は、参加した学生が体験したことを他に広める意味で講演会を企画したり、チャリティコンサートへの協力もおこなったりした。また、自分たちの国際交流プロジェクトも継続的に行うとともに、小学校へ国際交流の支援もおこなった。

結果として講座や演習が一過性のものにならず、受講した学生が主体的に活動することで、他の学生に影響が広がっていった。

○課題

次年度は、マクロ的なボランティア講座とも有機的に連動させ、事前学習も含めて、現地での活動を学生に企画させることを心がけたい。そのためには、現地の大学との国際協働プロジェクトを早い時期から立ち上げ、TV会議などを通して具体的な企画を共同で考えさせたいと思っている。訪問時には、その大学と共同で問題意識を持って調査活動などのフィールドワークを行い、調査の結果をプレゼン形式で発表させたい。そして、そのようなプロセスを経て参加型の必要なボランティア活動を考えさせたい。

また、滞在先のHOJでは学生が子どもたちとふれあう時間を充分とり、ふれあいのなかで人と人との交流の大事さを知って欲しいと願っている。他には現地の小学校とのつながりを深め、授業参観や、教員志望の学生の授業の実施についても現地の先生方との話し合いの中で実現させていきたい。

今後「国際ボランティア講座」で得られる知識に加えて、「国際ボランティア演習」を、外国の人に対して自ら働きかける「主体性」や、お互いに相乗効果を生み出し貢献することができる「チームワーク」をつける場として位置づけていきたいと思う。それが、国境や人種、文化の壁を越えて活動できる人材育成につながると考えている。

注 参考文献

- (1) ボランティア体験で学生は何を学ぶのか—アフリカと自分をつなげる想像力—岩井雪乃 人間環境学会論集, 10(2) 1-11 法政大学人間環境学会
- (2) ソーシャル・キャピタルの観点から見た学生ボランティア活動による過疎地域の活性化—和歌山県すさみ町におけるケース・スタディ— 浅野英一 摂南経済研究 第3巻第1・2号 2013
- (3) 海外フィールドワークにおける学習を促す要因の検討—協働する他者との関わりに注目して— 山本良太 今野貴之 岸磨貴子 久保田賢一 日本教育工学会論文誌 36 (Suppl) 213-216 2012
- (4) 開発教育 持続可能な世界のために 田中晴彦 開発教育協会 学分社 pp236-pp240 2008
- (5) マジカルバナナV3 2010 特定非営利活動法人 地球の木
- (6) ひょうたん島問題 藤原孝章 明石書店 2008
- (7) URL <http://www.artmile.jp/>

